

美術の窓(5)

百済・新羅の金銅仏
の特別展に寄せて

大和文華館館長 吉川逸治

如来立像(部分)
極楽寺蔵如来坐像(部分)
黒瀬観音堂蔵如来立像
海神社蔵釈迦立像
バイターバ出土

古代朝鮮の八十余体の金銅仏を集めて陳列することが出来ました。今秋の特別展観は、選んだ主題が少し特殊すぎて、限られた専門の方々の研究対象としてはよいが、一般の方々には興味を引かないのではないかと危惧しましたところ、開催してみますと、初日から予想外に多勢の方が見にこられて安心しました。

半島将来の金銅仏がこれほど沢山集められると壮観です。誕生仏などごく小さな像もありますが、ポスターに原色で出した長崎県の五島の極楽寺の金色燦然たる釈迦如来など、傑出した出来栄の尊像は実に堂々たる印象を刻みつけます。陳列中の仏像中に古代から日本に齎された金銅像が十数体もあって、これらは多くは、今日でもその地の寺社で信徒の方々の祈願を集める御本尊として祀られる像ですから暫くの間、ここに展示することを許可して下さいことを感謝しますが、これらの仏様のなかに特に優秀な出来栄の金銅像が多い点も注目すべきことです。朝鮮美術の研究家の着宿であられる元東京芸術大学教官の中吉功先生も、さきに挙げた五島の極楽寺の如来像や対馬の海神社の如来像、同じく対馬の黒瀬観音堂の如来坐像などの傑出した金銅仏が将来され、礼拝保持せられたことを驚いて話されました。統一新羅時代のこれらの金銅仏の達成した芸

術の高さは、まことに驚くべきことで、本国の韓国の伝世された遺例でも稀に見る高級な芸術品だとのことです。そして、これら三つの金銅仏がそれぞれ異った作風を示して、その背後に存在した統一新羅の仏教美術の幅広い豊かさを想像させます。

対馬の海神社の釈迦如来立像は、東京大学の故矢崎美盛先生がかつて九州大学教授であった時代に、この金銅仏の優れた御姿を指摘され、今日では美術史の大家になられた方々を学生時代に率れて対馬に見学に渡られた由です。この金銅仏は、もう古代釈迦像の古典的な形姿を達成して、わが天平から平安、鎌倉と時世の変遷を超越し、存在す如き仏像の像の典型を示すものと映じます。事実、溯れば、ガンダーラの古典的な仏像の自然主義を抑制して、形式化し、精神性を強調する五世紀のアフガニスタンのバイターバヤシトラック出土の神変の釈迦像に似て、ここまで古典技法を習熟した上で、東洋的な仏像の精神表現を達成したことを感じさせます。衣の襞線が紐状になって、リズムを記し、身体の動勢を指導して、精神化の一端を示します。統一新羅の金銅仏で、毛利久博士が指摘なさる如く、童顔短軀の特徴がこの像でも認められますが、美しい如来の御顔は像全体の精神を示すのに、三国時代の金銅仏の場合より、

一段と大切な役割をすることに気が付きます。それだけ、以前に比べて、写實的に人体の自然な姿を写し、顔面の精神的、時に心理的な表情を豊かに実現することとなったからです。平凡な、当り前の如く感ぜられませんが、このことが達成され、また人々に理解されるに至るまで、大変な時間と教育、教養が必要だったのです。鼻筋の通った豊かで端正な御顔、小さい、力強く結んだ口唇、美しい弧を描く眉とその下の聡明な眼、これが慧智と慈悲の心を示す御顔であると、作者も人々も納得し、人々の思慕すべき生の理想を身近かに感得せしめるのです。これが古典文化と称すべきものであり、仏教古典美術の役割であります。御顔の精神表現の役割が大切なので、小金銅像の場合は、特に頭部が大きく、体軀が短小になる結果が生じます。わが橘夫人厨子の御尊像も同じ傾向を示し、統一新羅の金銅仏と相似た姿を提示します。

ところで、対馬の黒瀬観音堂の御本尊は、もっとも自然な人間の姿に近く、衣襞はガンダーラ仏によく見られる鬚波式の流暢な襞さばきを示します。古典彫刻の写實的に自然な衣襞の流れを表現するだけではなく、一種の様式化を加味したアカデミズムなのです。これが統一新羅の作者たちにまで、中国を経て伝達されたことを示します。さきの海神社の如来像ほど襞は

形式化しませんが、慎重深く様式化を加味して精神化に貢献するのです。この像で興味を惹くのは、頭部から露呈された右肩、右腕、頸と胸の一部が一体として鑄造され、その下方の衣を着た胴体が別に鑄造されて、この上、下二体が挿込み式に結合される方式です。私には遠いギリシアで、黄金象牙像の製作方法が想起されるのです。この如来坐像もまた実に美しい作品で、すでにわが真観仏を予告するが如き感があります。

これら二体の金銅像は、御顔の表情とともに体軀も豊かな肉体性をその衣の下に示し、強調します。即身定仏の教説を具顯する像の如く映じます。この点が、もっと著しく主張されるのが、最初に挙げた五島の極楽寺の釈迦如来像です。自然らしさを写實的に表現する方法を積極的に推し進め、逞しい肉体の豊かなヴォリュームを強調し、動勢を生きと主張する身体に密着した衣襞の流暢さは驚くべきものです。バロック的とも称すべきこの写実と熱情の合体した力強い芸術はわが国の仏教彫刻のうちには類似した作柄は鎌倉時代まで降らねば見出されません。

三国時代の金銅仏については、信州、松本の観松院の思惟半跏像の御本尊など、非常に興味深い像がありますが、これらについてはまた、あらためて筆を執ることとします。

季刊 美のたより No.61

昭和57年 11月12日

発行 大和文華館